

『崔書勉先生と私』・・・学び・感じていること (国際平和への一歩を)

日韓談話室 世話人兼 事務局長 森松義喬

- 項目 ●運動 ●潤滑油 ●誠信の交わり ●隣国ゆえのお互いの悲劇 ●極東平和・東洋平和 ●崔書勉先生曰く
- お互いの民族の立場 ●災害の均衡 ●戦争も災害 ●ルールの作成 ●お金の後を追う
- お天道様はいつもみている ●本音・建前 ●日本の戸締り ●価値観の遠くない国 韓国
- 意識の変革(気付き) ●何から始める ●右・左 ●昨今 ●父・私・子供 ●怪物の力 (文末)
- 運動..

「崔先生は、お酒はお強いし、柔道選手のような頑強なご体型、学生時代にはどのような「運動」をされていたのですか？」

崔書勉先生曰く 「私はね “学生運動” ばかりやっていたよ。 わっはっはっ！」

(十六年程前の日韓談話室勉強会後の二次会の席にて)

ご自分の心身を鍛えるどころではなく、国を憂い命を賭しての闘いの大事を、大きな笑い声でご返答され、自分の質問内容の未熟さと同時に、崔書勉先生の「凄み」を改めて感じました。

崔書勉先生の学生時代は、金九氏(韓国独立党)傘下の大韓学生連盟委員長として走り回る勇猛果敢な青年期を過ごされ、無期刑の獄中にて、洗礼を受け、崔重夏から崔書勉に改名。出獄後、クリスチャンとして活動され、イタリア・バチカンへの

「亡命」を志す。その道すがら六〇年前の今日五月二十七日、日本に偶然に上陸させられる事となった、と伺っております。

それら、崔書勉先生の（小説を凌ぐ）ご経歴の詳細は、今までほんの一部分しか公にされておりません。

今日五月二十七日は「日本上陸六〇周年」のお祝いの宴はもちろんの事、私たち日韓談話室の代表世話人橋本明氏が出版される『韓国研究の魁 崔書勉』の「出版記念会」も兼ね、崔書勉先生の生涯の一部分を日韓談話室会員等の皆さんと、そして代表世話人橋本明氏の知人・ご友人の方々と一緒に確認し合える、というおおきな楽しみが相俟っております。

#### ●潤滑油・・

崔書勉先生は六〇年前の今日（一九五七年五月二十七日）、パスポート（旅券）が無いまま米軍用機にて日本に上陸。その後、最高裁判所長官の田中耕太郎氏・岸信介氏・福田赳夫氏・矢次一夫氏・木内信胤氏・金山政英氏・寺田佳子氏・橋本明氏・木内孝氏等々、非常に多くの人物に「日本国」と「韓国」（以下、日韓と記載）の潤滑油となる逸材と見込まれ今日を迎える、と解釈しております。

私も（大変恐縮な事とは存じますが）それら諸先輩方々の想いと同じくして、そして国際平和・東アジア平和、それを実現する前の隣国との平和、という想いで、崔書勉先生の日本におけるサポートの一部を微力ながらお手伝いさせて戴いております。

崔書勉先生こそが、日韓の双方にまたがり、記録の調査をされながら、双方の長所・短所を六〇年にわたり深く把握された本物の「潤滑油」となれる唯一無二の人物、と感じております。

● 「誠信の交わり」:

「朝鮮外交心得」にあり、「誠」を話し、「信」じ合う心を基本とする。江戸時代からは、双方が平穩となろうと心がけ、「商い」ができる関係（膨大な銀の流通）をお互いに長続きさせるにあたり、そのように言動してゆけば「搾取」し合う関係とは正反対な関係となる。信頼に足る貿易相手であればより大きな商い（物々交換）も可能となつてゆく。

日韓談話室の勉強会にて、日韓の長所・短所を確認しあい、腹を割って本音を語り始めた時、（すでにそのような発言がありますが）更に本格的に「誠信の交わり」が機能を始め出し、その先にこそ日韓の平和、そして東アジアの平和、その先の国際平和、へと拡大してゆければ素晴らしいことです。

「誠信の交わり」は、江戸時代中期の儒学者、そして日・中・韓の交渉役となつた雨森芳洲氏（あめのもりほうしゅう）が辿り着いた結論、「朝鮮外交心得」『交隣提醒』（こうりんていせい）の基本方針にあたる。

日本国内においても「誠信」とはならない事態が起こるものです。しかし隣国同士だからこそ、言葉の壁があるからこそ、疑われない・疑わない関係の構築が基本の方針であるべき、と雨森芳洲氏は言及し、  
そして、

- ・「外交は、常に故事先例が重んじられ、先例がやがて慣習となり、さらに“法”という形に定着」する。
- ・「いつ、だが、どのように処理されたかの“記録”を執る。
- ・「交渉事は圧力や技術に頼るのではなく、よりどころとなる確かな史料をもって臨むべき」と説いている。

江戸時代、朝鮮国王の外交使節団通信使（朝鮮通信使）、毎回およそ四〇〇〜五〇〇名が十二回にわたり来日し、

「使行録」・「通信使記録」（対馬藩宗家文書）等、様々な言動を大量な「記録」として蓄積し、ルール化した。「江戸時代の方針であった、とのが朝鮮通信使の記録から読み取れる」と、歴史学先生方のご教示にあった。そのためにも私共が、現存する記録、「倭館」や「通信使関係」等を真正に媒体変換し、後世への記録の継承が重要となる。

※ 私は「記録の保存・媒体変換」が本業であり、三十数年から大学の歴史学先生方にご交流を戴いております。

本文中の歴史記述は、歴史研究者ではない私の「聞きかじり」「付け焼刃」が多いことを何卒ご容赦ください。

### ●隣国ゆえのお互いの悲劇…

#### ★三〜六世紀…

邪馬台国の卑弥呼氏は、三世紀魏王朝から親魏倭王の金印を受け、「冊封体制」を拒絶しなかった。

日本はその体制に付かず離れずに、中国大陸との国交・貿易の円滑化を図っていた。

七世紀 唐の「冊封体制」下にて「朝貢貿易」でバランスを取っていた韓国内（高句麗・新羅・百済等）であったが、そのバランスが崩れ、「唐と新羅」の連合軍が「百済」を滅ぼす。

百済の遺臣達が来日し、「百済復興」のため、そして日本に在る「余豊璋」を百済王に復活させるための援軍を乞われ、唐の南下を歓迎しない日本はそれを請ける形となる。日本軍は百済軍よりも多い数万に及ぶ援軍となり、多くの船舶を韓国に向かわせて百済とともに、「唐・新羅」の連合軍を相手とする「白村江の戦い」となる。

当時「唐」は、日本の遣唐使を受け入れて文化の交流・文明の伝授等を指導戴いていた。日本は唐への恩恵を感じながらも、「百済」とともに「唐と新羅」連合軍に刃向う形となり、多くの死傷者を出し、そして惨敗する。

★文永・弘安の役…

の国難。大国「モンゴル軍」とその先陣となった朝鮮高麗軍による日本への侵略。対馬や壱岐など北九州が被害。奇遇にも二度の台風（寒冷前線説）に助けられるが、防御に着いていた多くの「御家人」等は、従来とは違った戦い方ながらも勇敢に戦ったがその報償に恵まれず、それらの不満により鎌倉幕府の崩壊、日本国内の「大きな戦」へと繋がってゆく。

★文禄・慶長の役…

大国「明」から、豊臣秀吉氏へ「冊封体制」下に入ることの督促、それらなどが起因となった「唐入り」（明への戦い）。明に攻入るため、朝鮮王朝へ支援の要請。当然に拒絶される。豊臣連合軍は釜山より明を目指して韓国内を北上するが、「明」に到達できないまま韓国地域内での戦いが続く。

平壤まで北上した豊臣軍約一万五千人は、迎え撃つために南下する「明」の四万人以上の軍勢にて劣勢へ。豊臣秀吉氏死去に伴い退陣。豊臣政権後の徳川政権時代に「朝鮮征伐」という言葉が誕生する。

★鎖国…

スペイン帝国等の当時西欧先進諸国による、全世界への早い者勝ちの植民地争奪競争において、極東アジアにある明国・韓国・日本等は、あまりに遠隔地であった為、西欧からの大人数での軍艦の移動による「侵略」からどうにか免れることが出来ていた。

しかし徳川幕府は、他国との「通商関係」は必要とし、政策として主に中国・韓国・琉球・オランダ（キリスト教の布教の禁止を約束できたため）との貿易に制御する「鎖国」を実現した。

★幕末..

オランダの国力衰退、そして「鎖国」の解除を求める米国・ロシア・英国・仏国等の日本への進出。

当時日本は、中国（清）の強大な動員力・軍事力は全世界に通ずるもの、と太古の昔より敬意をはらっていたが、驚くことにアヘン戦争にて清は英国に敗退し、西欧の「侵略のやり方」を見せつけられ、日本国内に海外列強諸国の「脅威論」が高まる。

そしてペリー艦隊の大砲の「恫喝」に国内は騒然となる。「徳川幕府」は米国からの強硬な交渉で不利とならぬよう粘ったが、「開港」と不平等な「条約」、それらの一部分を許容させられ、国内に「尊王攘夷」を掲げる「討幕団体」が多勢と成る。※一方庶民は「黒船」を見んとの好奇心が、危機感を上回る多くの見学者が絶えず、「異船見物無用」の立て看板が出る程に。

「討幕団体」と「徳川幕府」の「双方」へ、歴大な武器が英・仏国等から大量に流入・販売。幕府の大政奉還後にも、南北戦争の中古銃等、インディアンを撤退させたスプリングフィールド・マスケット銃等の販売が続くことと成る。

日本国内の「金・銀」に群がる海外列強諸国の「武力」にて開国せざるを得ず、「パクス・トクガワーナ」が終焉させられる。

★明治期から..

その後も自国自立の維持、その先の東アジアの平和・世界秩序の維持を明治天皇も（世界はひとつの家族）公言されつつ、日清戦争・日露戦争（統治..台湾・韓国）・日中戦争・大東亜戦争へ、と開国以降は国外からの大きなうねりに流されてきた。

★終戦後の日本..

戦勝国・中国等からの戦争の「責任の追及」に対して可能な限り穏便に実行してきた。開戦の当初、

【Remember Pearl Harbor】（なんと卑怯な奇襲攻撃。パール・ハーバーの恨みを忘れるな！）と米国は世界中に宣伝・周知させられ、「黄禍論」の脅威の排除（排日移民の徹底管理）、その実行のため、東アジアにおいて共有圏の構築に励む日本国に

対し、米国はこれを機にダウンフォール作戦（日本本土上陸作戦・全滅作戦）（米国世論一部にあつた）に向けて対戦開始。ルーズベルト大統領とチャーチル首相は、パール・ハーバーへの奇襲攻撃の第一報に「歓喜した」との記録がある。

「大義名分」を手にする事ができた米国は、遠慮会釈無く完全に勝ち組と成れる対日戦争の参加券を得て、好景気に沸く。

戦後において：開戦の「正当性」を日本人は主張しなかった。昭和天皇陛下に敬意を抱き、その「戦争責任」を厳しく問わなかったダグラス・マッカーサー元帥に対し、何らプラスとはならない。：と日本国民の多くがそう判断したと想像できる。そして現実として

日本は、日本国憲法の「改正」が成され、「非核三原則」が国是と成り、他国を侵略する「軍隊を持たない」と公言することと成り、「日米安全保障条約」を締結する形と成り、米国の「軍事基地」の設置（日本国内各地に）される事と成り、世界一大量殺戮兵器を抱える米国の「軍勢力」に日本自体がガードされる立場と、成って行く。

米国は、民主主義国家の同盟国でありつつ、共産主義大国ロシアへの最前線エリア、と日・韓の位置を重要視している。今の日本人の平和感、国内に設置された米軍基地等のロケットの「方向」が日本国内では無い為である。「方向」が、日本国内の主要首都に変更される事が絶対に無いよう国内与党等が・目配り・気配り・思いやりを絶やすことはない。

終戦当時の日本人は、自ら食べてゆくため・生き残った家族の生活のため・そして焼き尽くされた各都市の復興のため、「エコノミック・アニマル」と揶揄される程 寝る間も惜しむように働いている。（働く事に生きがいを見出しながら）そうして「培い」・「生まれた」厩大な「技術力」・「国益」を、東アジア諸国のODA等・米国等へ提供してゆきながら「東アジアの平和」・「自国の安全」・「国際平和」の維持に、可能な限り尽くしている。

★人種差別..

その「撤廃」を国際連盟時代以前から、日本は率先して主張し続けている。そして戦後、世界中の人種差別者が少なくなったのか？それとも「報道規制」がされているのか？日本人の被害の情報も、話題となる情報も、少ない。

終戦後の米国は、ロシア（共産主義の超大国）と正面から向き合わねばならない。

米国に内在している「人種差別」の意識は、政府内各派閥において票数等、他にも大きく影響しかねない解決が困難と思える根本の問題である。民主主義国家であるため民主的に選挙（多数決）にて人種差別の「有・無」の決定をすべきであるが、昨今までの米国の多くの政治家はその是・非を選挙にてわざわざ問わないようにしている、ように感じる。

西欧のキリスト教信仰者の一部に「神に似せた白人だけが人間」、と思わせる言いまわし、そして有色人種はその分だけ動物に近いとの差別がある、と聞く。伝達のミスであると思えるが、それはその「教え」を享ける側の解釈の問題である。

「肌の色」の差別に「理性」は無い。

「理性」に目覚めれば、神様の意図に近づこうとする「人の道」を歩める。

国際平和に貢献した人物が「尊敬」され、報われる、TVやWEB等を通して益々世界でそう評価されてゆく未来となろう。国際平和への貢献に、「逆行」する言動の人が「差別」されるのが「道理」である。

「人種差別」を推奨する人達を、世界の人々が「尊敬」をすることは無く、理性ある人からもそう判断されてしまう。

幕末以降、明治・大正・昭和・平成・これからも、世界中の様々な出来事の根幹に、大なり小なり「人種差別」の価値観がある事は、世界中の七十%以上の有色人種と逆行し、その摩擦は時を得てでも「次の戦い」へと必ず繋がってしまう。



●極東平和・東洋平和..

と、伊藤博文氏と安重根氏の目的は「東アジアの平和」、と共通していた。

しかし、日本の初代内閣総理大臣 伊藤博文氏が、他国民から射殺された。

伊藤博文氏は尊王攘夷の「志士」として働き、「海外」にも学び、「民主主義」の始動（憲法発布）等 日本の「近代国家」への発展に大きく貢献した初代 内閣総理大臣（第五・七・十代も務める）である。

伊藤博文氏はロシアの「南下政策」、東アジア・日本への進出を阻止しようと「奮迅」する人物であった。

関妃氏と三浦梧楼氏等もそうであるが、「被害者」と「加害者」（談話を諦めた）となった事は、歴史上恥ずべき事である。

私は自国の立場からのみで無く、第三者の視点から見ようと試みるとき、「大きな歴史の流れ」のなかにおいては「双方」が「被害者」であり「双方」が「加害者」でもある、と思える。

その後、初代内閣総理大臣と高宗の妃をお互いに殺戮された相手国民である「日・韓」、そして大東亜共栄圏の成立に協力する「台湾」、そして西欧植民地支配からの独立を望む「東アジア諸国」、と共に大東亜戦争を各地域で展開する。

結果、多くの東アジア諸国が西欧の植民地からの脱却、自主自立・解放へと主張し、実現へと繋げてゆく事ができた。

しかし、途中日本側は、「暗号解読技術」と「軍需物資」の双方で米国に劣り、無条件降伏へと行き着く。

「歴史に “E” をつけて現実と比較する事」は無意味である。しかし方が一

- ・ミッドウェイ海戦にて、日本側の「暗号文」が解読されていなかったら、それにより、
- ・米国本土への空爆（一部分でも）。それ故に拡大する米国内反戦運動に乗り、優位な状態で停戦協定が結べたら、又は
- ・日本から、米国への、世界への、「停戦交渉」が早い段階で受け入れられていたら。

韓国民の日本国民への国民感情、そして東アジア平和への感情、世界平和への感情、は現在と同じであろうか？

韓国が「南・北」と分断させられず、二分する争いに巻き込まれずに済むことが出来たか？

ともに、「黄禍論」の排除、有色人種の非植民地化運動への道を、

伊藤博文氏と安重根氏がともに目指した東アジア平和への道を、

その「王道」を、「日・韓・台等 中国含」で協力し合いながら、ゆくゆく「世界の平和」へと先導することが出来たと思える。

●崔書勉先生曰く…

「殴った方は忘れるが 殴られた方は忘れないものだっ！」と。

日韓談話室勉強会 二次会の席において、私たち日韓談話室メンバー（多くが日本人）に時折厳しく言われる。

韓国人側から見る日本人側への大きな「恨」をその都度強烈に感じる。その「恨」は何に起因しているのか？

そして、人として逆の立場となればどうであろうか？ と毎々考えさせられる機会を戴く。

●お互いの民族の立場…

に、日韓は立てるのか？ 「経験」・「価値観」・「教育・指導」が同じでは無いことは、非常に大きな「溝」であろう。

《日本人の生存地域》は… 【自然が主な相手】、地震・台風が多発し、自然との闘いから逃げられない地域。しかし島国である分、欧米列強諸国の軍艦や大砲等の技術の進歩と反比例してそれら強靱な国々からの「服従の催促」を歴史を遡る程に未然に防げた。アジア大陸極東の「島国」という好条件であったため、日本国全体が他民族に武力で入り込まれ牛耳られる、という経験は縄文民族と弥生民族の交代？以来、運よく昭和二十年まで皆無であった。

《韓国人の生存地域》は… 【人間が主な相手】、アジア大陸に繋がる半島のために、たえず地続きの隣接地から攻め入ろうとする巨大な戦闘集団の直撃・侵略。そして大軍相手の、有利とはなり難い「交渉」、それによって維持ができる地域住民の生命の維持と生活の安定であった。

「島国」の日本は自国内の群雄割拠「内紛」、領地争奪の戦争においては、城主の「首」の取り合い、その為の下工作・駆け引きにて、戦争の勝敗を「即」決断できやすい、という

「内情」、そして敗軍の部下・敗軍の地域住民などが、勝軍によって皆殺しにされるなどの事例が多くは無い、という「内情」、があった。しかし「宗教」が絡む弾圧・戦争は強硬となり易かった。

※ 日本国内では、敵対した人間を「殺し合う」チェス方式とは違い、持駒として「活かし合う」日本将棋方式が主流。

日本の国民はそれら日本国内独自の有り難い「内情」を予測し、それにある程度甘んじる事が出来た。しかし、

● 災害の均衡…

神様があるとすれば、各国の「幸運」と「不幸」（災い）の均衡を保つように、宿命とされたか？  
そう思えるほど、日本は世界トップクラスの「地震」被害国であり、かつ「台風」の通り道である。

あまりに多発する地震・台風により、数え切れぬ人命が奪われ、この凄まじい「災い」が未来永劫に続く。

※ 「地震」の比較… 【約八十倍】 M3以上の地震数／年間 （日本約七百回／年…韓国約九回／年）…WEB情報

※ 「台風」の通り道・直下に日本列島がある。（毎年 春・夏・秋）…巨大な台風も多く直撃

「凄絶」な生存地域である。

私自身、「天災」の少ない国が羨ましい気持ち、は当然にあるが、此処に住む人間に課せられた天からの「宿題」である。

【天が相手】ゆえに天命により「何時死ぬ」かの予測が出来無い。頻繁に起こる災害、その「被害者」の惨劇に共感しつつ、死と向き合う日々。達観せざるを得ない「心」の状態。

天災を「被った人」、生き残った人同士で助け合い慈しみ合う「心」。助けて戴いた「義理」を他に返そう・果そうとする「心」。

後悔の少ない生き方の実践を心がけ、そこからは必然と 茶道・華道・書道など、鍛錬して「心」を究める「道」を好む。

座禅に親しみ、「物欲」を超越した「わび」・「さび」・「いき」、の世界を静観、感受して憧れ、

それらを美的理念へと昇華してゆく「雅」の「域」… 個人差こそあれそれらを自己流に感じている。

● 戦争も災害…

戦争は本来、人災なのではあるが「災害」の一つと捉える。終戦日である八月十五日（実際は敗戦後も含めて）に至るまで、日本国民と在日等の諸外国人とでうけた被害は、世界に類の無い「地獄」であった。

日本列島の焦土化、主要な都市等に大雨のようにバラ撒かれた焼夷弾、二回に及ぶ原子爆弾の投下。それらの空の下には数千万人の、普通の人間の「生活」が在った。

私の父が十四歳の時、神戸市内 自宅近辺に落下した焼夷弾にカバーをかぶせて対処した、との武勇伝。そして焼夷弾にて町中が焼き尽くされ、死につつある人・多くの死体が転がり、最初は歩けないほど怖く、恐ろしかった、が、直ぐに慣れた。と母から伝え聞く。(父は戦争時の恐ろしい現実を、私達子供に直接話すことはほとんど無かった)

昭和ヒトケタ生れ(父・母)は、神戸市・福岡市への焼夷弾の大雨の下、多くの親戚・知人達が無差別に焼き殺され、死ぬも地獄・生きるも地獄の中、「鬼畜米英！」と敵国をこころから憎み、恨みとおした。

※戦後、それに対して「恨む」ことを止めている、と思える言葉があった・・・。

マッカーサー元帥による、昭和天皇陛下への賞賛、民主主義の先陣となり「社会貢献した人間が報われる仕組み」の後押し、「餓死者を出さない政策」への協力、そして「戦争放棄の実現を試みる日本」を応援、などのためであろう。

・・・「仕打ち」に対する「仕返し」は、時を経てでもその「仕返し」に繋がり、「心に晴れ間が無い地獄」・・・と。

日本人は「天災」に鍛えられ続けたDNAの継承により、災害に耐える・潔く諦める傾向があり、「改善」に歩む力が強い人物が多い、と。・・・そして、軍人の暴走を止められなかったこと事態をも、各軍人のその時の様々な立場や都合によって自然・必然のなりゆきなのであるかと、あえて「災害」と捉えて「次へ」進む人間を造りあげている、と。・・・

私は、身近な日本人を見ても、日本人の「記録」を顧みても、「不屈」・「勤勉」・「前向」かつ「楽観的」な傾向を強く感じる。

● ルールの作成…

「島国」の安全性を古くから享受できた日本。反して、地震・台風等の「天災」の直接被害が非常に多い。大陸に繋がっている他の諸国に比べて日本人は「人災」に対する甘え・猶予があり、その分危機管理意識の「不足」に繋がっていると思える。

どうにかなる・話せばわかる、という経験値が多く、良いにつけ悪いにつけ、最後には「お天道さまの決するままに」、と。

島国の日本人と、大陸に繋がる他の多くの国民と、お互いが解り合える心情となれるのか？

不安である。「生存地域」・「経験」が大きく異なれば、「価値観」・「教育内容」も大きく異なってしまう。

【相手国の立場】にお互いが立て無い、のであればどうしたら良いか？

今まで・現状は… 価値感・宗教の異なる世界各国の政治家方・官僚・有識者方が協議の場において、「無知の罪」を中傷し合いながら、五十歩百歩の双方の「歴史作文」の優位性を主張しあい、自国の不利を隠しながら、

「大量殺戮兵器」をチラつかせつつ、利益を盗み・奪いあう。

終止符を、それに打つ為には必ずいつかは「談話」（話し合い）に辿り着く。EU一部分にて成功していると感じるが、先ずは、お互いの現状までの「歴史」、そして今までの「感情」、「本音」を思いっ切りぶつけあう機会が必要。

ルールとしては、松岡洋右氏が国連を脱退・退席のような態度の禁止。「逃げない」「逃がさない」ルールの作成が必要。そのルールとしなければ、戦争を「故意」に起こして、お金に成る・国際的立場が優位と成るべく企む組織・国があれば、まんまとそれらの期待どおりとなり、なすがままと成ろう。

「戦争」ほど、国家間の「格差」を「新た」に生じさせる行為は無い。それに

「勝利」した国ほど、資金的にも、経済的にも、軍事的にも、完全に「優位」となり、

「敗退」した国は、その「真逆」に追い込まれる。

「勝てば官軍」。「記録」さえ都合良く改ざん・消去する事が繰り返されてきた？ 公文書管理を誠実に行える国は理想である。

(現状) 今、そのときを各人所有の携帯端末等で「即」電子映像化、各サーバーに分散管理、同時公開することが可能である。勝利した国が全世界のサーバー等全てを管理下としない限り、記録の改ざんや消去が事実上出来にくい時代となっている。

過去の世界中の多くの戦争は、

【強気を挫き弱きを助く】や【義を見てせざるは勇無きなり】など、日本人が非常に好む「価値観」とは、「真逆」が多い。

※ 立場が強く横暴な人の言いなりには成らず、弱く正直な人を助けよう・勇気を持って正義を通そう、との心意気を賛美。特に江戸時代の武士の心性であり、士・農・工・商等の多くが好んだ「格言」である。

幕府側においても、その感覚の対処を行っていた様子が、とても多く伺える。

(例) 安政大地震の直後、「御救小屋」の設立、一週間で二十万人以上の「御救米」(炊出し)等、幕府主導の「弱者の救済」、その事前準備と迅速な対処。「管理する側・される側」、双方にある武士の心性。「パクス・トクガワーナ」の所以でもあるろう。

戦争実行の「大義名分」を必須とするのは戦争を仕掛ける側。自国の国民、世界中の人々、に対して開戦に値する説明責任の「放棄」はあり得ない。又、子子孫孫と後世に遺すに恥じない自分達の「正義」を証明する為の「記録」となる。

日本が起こした「柳条湖事件」の場合、その事件の発生の真偽において、途中より日本側の「大義名分」は「嘘」と解かる。

強硬となった日本軍により、世界から理解されていた日本国民の「正直さ」の評価が、一瞬で喪失した。

「自分達の都合さえ良ければ『嘘』も有り」という国・軍事体制であれば、どこの国もまともに付き合えなくなり、どの国からも賛同されない。「正義」の「嘘」ほど国の信頼を無くしてしまうものはない。

その嘘が、巧みに「策略」されればされるほどに、その策略・嘘が明らかとなった時には、信頼がゼロだけではすまない事態に陥る。日本は、自らの嘘により究極まで追い込まれていった経験者である。

今後、各国の知恵者が集り、過去の戦の凄惨さの共有を「記録映像」で同時に確認すべき。定期的な世界中への放送も必要。そして開戦の理由に至った理由も確認しあい、その意識の有る中において「平和」にむかう意識を共有し、

「戦う」ことなく平和となるには話し合う「談話」しか無い、と否応なく気が付くこととなろう。

その「談話」の「方法」を導きだしあう為の「談話」を始めることに気が付くであろう。

その中にて目標が必要、と気が付けば・軍需産業から未来産業に！・自然を保護しよう！等々、様々な「目標」の設定に必ず辿り着く。

ルールには・「嘘の禁止！」等、そしてゆくゆくは各国が望む・利益の調整・分担の決定！等それらを「談話」して決めてゆくこと、と気付く。

そして、その「談話」の「定期的」開催を繰り返す、その都度「記録」を重ねる。それら記録、多くの事例から作成された新たな「ルール」は、東アジアのみでなく世界の「法律」へ、と繋がってゆく土台となろう。



●お金の跡を追う：

「 Follow the money 」 【歴史を追う時にはお金の流れを追えば真実が見える】

とは、米国スタンフォード大学フーヴァー研究所指導者の「格言」。そして

「本当の歴史は必ずしも美しくなく、むしろ醜い話で満たされている。しかし、それを知る事で

われわれはより強く、本当の意味で今の世界を知り、自分自身を知ることができる」と続く。

温故知新…「歴史」を遡り、日本の、そして世界の、お金（金銀財宝・資産・資源や各有価証券等）の集中が  
いったい「何処」にされてきたのか？ その「事実」を追うことである。

そして醜い事実であるが、大量殺戮兵器を多く作成する地域、そして所有する国が、そうでは無い各国に、恫喝まがいに  
不利な商談等を仕掛けてくる、「理性」とは離れた「弱肉強食」レベルの思考から抜け出せない事例が未だに多々ある。

それらを変えられない、私も含めたほとんどの人間は、その分だけ「勇氣」「知恵」が少なく「機会」を掴む力が弱い未熟  
な人物であろう。しかし絶対に諦めず、自分が・今・誰と・何を言動すべきか、を代議士・官僚等に提案し続け、自らが  
「力」となって貢献してゆくべきであり、気が付いた本気の人が動き出す、それを「伝染」させながら動き出すことが大事。

各国の最優秀の知恵者・人格者であつてほしい各国トップ方々が「世界の平和」とは「逆」の言動が未だ多く在る。  
今こそ、「お金」と「武器」に対して、俯瞰・長期の視点に立てる本物の知恵者が「誰なのか」、その活躍が世界を変える。

そして「戦争」の目的となる「お金」に対する各国の価値基準の「相互理解」。

そのたの教材（共有情報）も必要である。今までの日本は、世界との商いの有り方・金銭的価値感の歩調を言い現す過去から言い伝わる商いの「心」が、若干なりとも共有を頂き、現在の日本がその分だけ理解されていると思える。

今後は更に

- ・「悪銭 身につかず」(Soon gotten soon spent) ʼ &
  - ・「働かざる者 食うべからず」(He who does not work, neither shall he eat.) (不健康方の例外はある)
  - ・石田梅岩氏が明確化した「商いの基本」、日本版 CSR (Corporate Social Responsibility) と言われる。
- などの「お金」の価値観の相互理解のための「共有の情報」。

世界中で、それぞれの「厳格な商い」の環境にて極められた人間同士であれば、ルールに誠実な商人である事は間違いなく、「同類」の価値観が多く共有できる、と思える。

各国にある商いの在り方は、民主主義・共産主義等は問わず、それらの公開を様々な外国語で「共有化」がなされることがルールに基づいた平和な「商いの基本」の再確認に、必要となる。軍備をバックにした「脅し取る金銭」は、「商いの道」では無く、しっかりと永続的な価値観の共有ができて、初めて戦争原因を「回避」できる可能性が、その分だけ高まろう。

そして又、世界各国の今後の「経済基盤」、そのバランスの調整を要す。

日本も韓国も、世界中の様々な国も、他の国からのお金の争奪戦に振り回されにくいよう、各国の

「長所」を更に活かした「経済基盤」の再構築が急がれる。

※ 某学者の進言：

「今後、日本を良好に維持させる為に、自国の【情報管理】を強固に、徹底した【自国防衛設備】を供えつつ、【食料自給】を上げ、【新資源の開発】・【開発特許の充実】を進め、他国からの外圧でお金の流れを歪められにくい方向へ」とある。今の私達の世代が本気で実現しなければならぬ。

● 「お天道様はいつも見ている」：

神様・仏様・ご先祖様はいつでも見ている。神様を裏切らない、ご先祖様・家族・に恥じないように生きなさい。との寸分の「猶予」も無い、非常に厳しい「教え」である。

私の父の世代にも、私にも、先祖から代々そのように「教え」られており、もちろん私は自分の子供たちに対しても、ものごころがつく前からそのように教える。

世界中にも似たような「教え」は多々あると思う。が、先日

アジア大陸の小学校教室、その授業風景を映したテレビ番組にて、先生から小学校生徒への「言動」。

「人から騙されないようにしなさい！」（と厳しい口調）、真剣に頷く小学生達。「教育内容」に驚く。私達・日本では、「人を騙さない」（嘘をついてはいけません）「正直・素直・礼儀」を重んじる、との当然の「教え」である。

日本の「教え」の大本には、「神様、仏様、ご先祖様はいつでも見守ってくれている」（助けてくれる、では無い）等であり、それは、他人が自分の周りに居ても居なくても、いつでもどこでも、神様に、そして自らに、「恥じない心」で在る事、自分勝手や我がままを「恥じ入る心」を幼きころから語り続けてゆく。「誠信の交わり」に必要な「自己の確立」であろう。

●本音・建前..

「【解説が難解】な宗教の教えは、私は理解不能、理解する時間を優先できません」と。そして余裕の時間が少しでもあれば、「仕事」で社会貢献する事が自分の役割故にその勉強と効率化等に励み、そして時々趣味や旅行も楽しみたい、と。「お天道様はいつも見ている」という「教え」はそのような「本音」をも、素直に判断させることに繋がってくる。それは同時に「建前」の必要性を生じる。

※「智に働けば角が立つ 情に棹させば流される 意地を通せば窮屈だ 兎角に人の世は住みにくい」と夏目漱石氏が小説「草枕」の冒頭にて表現した「本音」。

「自主自立」、自らの「本音」を導き出す思いを「沈黙は金」とするのか。又は

「発言」をしなければならぬ立場の人の場合、何の目的で？ だれに対し？ そして時と場所と場合（TPO）により、知恵を要すことではあるが、表現の工夫が必要となる発言となろう。

「本音」を歪めて話すのでは無く、TPOにて説明の仕方を広く考えて行うこととなる。

兎角住みにくい世、において「本音」を話すには、思いやり・知恵を大いに要するがゆえに「建前」を要す。

発言しなければならぬ立場の人、発言不足とはできない方の場合ほど「建前」と「方便」を上手く使いこなす能力が高い。冗談か？本気か？すら判断できぬよう、時にチグハグに話し、笑いのオチを計算しつつ、そして聞く側の度量に判断を任そうとする知恵者、政治家や組織の長などに時折居られる。

崔書勉先生の発するお言葉には心根の優しさも含め 時に天才的な建前論者の「城」、そのとても高い処、と感じる。

私はこの「超人」に勝る人に会えない。身近に居られる嬉しさ！それと同時に「日本人にも」在るはず、と信じている。

●日本の「戸締り」:

家の戸締り習慣の話。 当社は一九六二年に父が創業。 その会社（東京都新宿区）に一九八五年入社した私は二年後に農家の空き倉庫（千葉県佐倉市）を当社の中古機材置き場へ、との交渉を安価に成立できた。

「お中元・お歳暮」を毎回、倉庫に隣接する大家さんのご自宅へ持参。

しかし、お中元の時期はご自宅にご不在が多く、私は縁側から靴を脱いで仏間に上がり、仏壇前に沢山並べられた他のお中元やお香典の脇に当社のお中元と私の名刺を置いて帰る、という習慣でした。

※ 私の親戚の自宅・福岡県八女市も自宅不在でも玄関・縁側も空けっぱなしであった。

一九九〇年頃、佐倉市倉庫の大家さん曰く

「家の戸締りをする事など普段はあまりなかった。でも最近、近所で急に盗みが多くなってるね」との事。お中元・お歳暮のご挨拶は宅配便に変える事となりました。

一九九〇年代頃から、急に日本国民の「品格」が極端に落ちたのか？

それとも価値観の異なる人物が急増したのか？

原因は、地元警察署に問い 犯人の詳細の正直な回答を得られれば、明確に出来るでしょう。

●価値観の遠くない国 韓国:

「森松さんは、平家と地方豪族（九州）の血流に繋がる、と聞いたけど何のご縁で日韓関係に携わっているの？」

というような質問をうけた事がありました。

桓武（平家）天皇の生母、高野新笠は百済の武寧王のご子孫との説、平成天皇陛下のご発言にもあり、私はその分韓国は近い国、という思いが高くなったと言えるのかもしれませんが。しかし、それ以前に

崔書勉先生とは、三十数年前仕事を通してのご縁が始まり、以降、そのお人柄に大きく惹かれ、「この人の喜ぶ顔がみたい」との思いが私の根底に出来たのです。  
なぜそう想ったか？ は未だに不明なのです。

韓国と日本の「常識と良識」は他国と違いあまり遠くはないとも感じる。たとえ遠くても近くても、たえず双方が東アジアの平和、国際平和を諦めず、世界中が今後どのように環境が変化しようと、隣国であるからこそ、「誠信の交り」の基本を持って、さらに「談話」を・・・と願う。

●意識の変革（気付き）..

「お天道様・神様に恥じない」、その価値観が今後世界中に共有できてゆけば、賢い人間へと大きく成長できた言動が全世界にて増えてゆけるでしょう。

しかし現実には：万一、他の国から日本に対して戦争を仕掛けられ、相手を攻撃せねば家族も仲間も殺戮されるという環境となれば、戦争回避主義者の私の心が、「鬼」と化すかもしれない。

「自分達の幸せ」の「達」の「広さ」「幅」を自分も含めてひとりひとりが大きく広げるべきであり、各人物の「幅」の狭さが、歴史上止む事の無い「戦争」という化け物の各人の心の中の「正体」かもしれない。

【SF作家 星新一氏の物語】… 核爆発（実験）が止まらない地球人。

そこに恐竜のように大きな宇宙人が地球を襲来。世界中の各国で協力し合って宇宙人退治。

退治に成功し、その後地球人同士が争わなくなる、というストーリー。（原文では）

「いままでの原水爆実験など、実にはかばかしいことだった。そのようなくだらないことは、今後二度としないことにしよう」とある。共通の「敵」ができた瞬間の「意識の変革」。同じ地球人同士で憎み合い戦っていることの愚かさへの「気づき」。人間の素直な心「本音」、と「気づき」の面白さは、人間の「無限の可能性」をも気付かせてくれる。　まず日韓にて、

・「そろそろ、　本音の話を、しようじゃないか」

…　お互いに、「嘘」を控えめに、足を引っ張る事少なく、冷静に、謝罪し、許し、感謝し、協力し合い。

・「もうそろそろ、　お互いが報われる新しいルールを、造ろうじゃないか」

…　お互いに、長所短所を確認し、「誠信の交わり」を基本に。利益分配のルールの「談話」を。

・「談話のルールを、　日韓の基本のルールとして成功させ、ゆくゆくは国際平和のルールの礎となるように

…　してゆこうじゃないか」と。

現実的には… 誠のみを「談話」しようとすることは理想ではあるが、自国の不利を覚悟して話しましょう、などとバカ正直に縛り合うルールでは、お互いに「談話」が長続きできないでしょう。長続きさせるには、忘れたり・とぼけたりには、お互いに真剣に突っ込まない。そして黙して語らずはあえて有り。しかし、絶対に「嘘」は禁止。… 商いの世界においても信頼が「ゼロ」となる。

そしてお釈迦様は、高い目的遂行、そして他者を陥れない、のであれば「方便」としてその「嘘」を黙認の範囲としている。「本音」を語り「方便」を笑いながら許し合い、お互いに可能な限り双方の利益を維持する等、助け合うための「談話」。

お互いに見栄やプライドは横に置き、恥ずかしがらずに「本音」で頼み、怒り、等を吐露し合い、「平和」の大切さ、その目的に、気付き、それが継承できれば日韓が平和に向かう世界への「先陣」となれよう。

● 何から始める…

世界中の未来を担う少年・少女が学ぶ各国の歴史教科書。

その「公開と比較」が出来得る情報化から。世界の各国政府が許可している歴史教科書の共有。その内容や解釈の多くの「差異」は当然、と覚悟しつつ。各国の歴史教科書の「比較情報」は必要不可欠な共有されるべき情報であり、今まで大規模になされていない事、広く周知されていない事、が不思議である。

最初に公言する。「二〇二〇年四月から教科書を収集する。」と。

そして、歴史を学べる各国教科書の小・中・高等学校の原本を、現金で個々からでも収集して、翻訳。



「日本語・韓国語・英語・ロシア語・中国語・スペイン語等々」、世界各外国語に翻訳して公開する、と。WEB上にて「公開」され、誰でも・何処でも「比較」ができていくみをつくる。

それこそが「談話」「国際平和」に向かう事前の「相互理解」のために必要不可欠な「情報源」となろう、  
……とは、日韓談話室メンバーの言葉にもあった。

そして、その実現は有志さえいけば困難なことでは無いであろうが、進んでいる兆しを見ることができない。  
「誰が」・「いつまで」・「どのように収集」・「何のフォーマット」・「WEBで公開」には、難しい問題は無い。

しかし、「誰の責任で？」・「いくらまで？」・「勝手に公開して良いのか？」「セキュリティは？」と、なると急に困難となり得る。  
この「情報の共有」は国際平和の構築のために、いつか、誰か、が遅かれ早かれやらざるを得ない「必須課題」。

「十数億円をかけてでも私がやろう」という資金は、今の私には持ち合わせ無く、  
日韓談話室等において、その第一歩がスタート出来ないか？「崔書勉先生方にお伺いを！」と考える昨今です。

世界中の歴史教科書の内容の「統一」となれば、「談話」の習慣も無いまま、いきなり目標として各国への連絡をすれば、  
その段階で実現はほぼ不可能となろう。

しかし、昨今使われている各国の歴史教科書の「公開と比較」となれば、  
有志において、現在使用中の歴史教科書の収集とWEB公開は、「予算」と「覚悟」が整えば、可能である。

※ 「国際平和」に向けて、先ずは各国の歴史教科書情報の「公開と比較」こそが、本当の「スタート」である。

●右・左…

日本国民が、病氣・事故・ケガ・被災、困窮や年金受給等、何かしら困った時、「相談」に乗ってくれる所は？  
他の国では無い。

今まで、ご縁が有って自分が生まれて籍を置く日本において、義務教育により勉学に励める機会を戴き、多くの内需拡大予算により、社会インフラの構築と維持・仕事を行える機会等を作り、自分達が働いたお金で各税金を正当に支払う。それらの循環で「経済」の活性化・「平和」が維持されている。

国民全体で、3Kの仕事をも厭わずに「国益」を支え、それを他国から奪い取られないように覚悟して言動する時。諸外国の頭脳・肉体労働者等、日本国内に受け入れよとの力があるが、犯罪を予防する体制の強制、選挙権・法令の見直しが急務。そして、将来国内の景気状況等により一方的に祖国に返せるか等 国内外に多くの問題の種を撒くことに成り得る。

※今こそ、日本人の健康な高齢者・主婦・身障者・ニート等が、この国を救う「力」となる時、であろう。  
私は時折、知人の与・野党の代議士の各政策勉強会に参加する。

その会の終盤にある各代議士への「質問」、その内容は、ああしてほしい こうしてほしいとの「要求」ばかりが発言される。

日本国民は、要求のみを国・政府に言及するだけではなく、「産・官・学・民」が、ともに国益を上げるために、そして、ゆくゆくは「国際貢献」（外貨の獲得）へ、と繋がられる仕組みへの協力を提案し、実現してゆかねばならない。

「要求」から「提案」へ、自らが参画（頭を使い、汗を惜しまず）協力し合える手法を持った「提案書」を考えて提出し、それを実現してくれる代議士へ投票すべきである。真剣に対応してくれる代議士がどうしても居ないのであれば、自ら立候補、又は思いの強い仲間を推薦してでも、代議士の立場に近づく準備をすべきである。

戦後より、「国益」という言葉を使用するだけで日本においては「右翼・タカ派」では？と偏見の目でみられる風潮が有る。そして「国歌・君が代」を唄うことを拒む国民がいることも、世界に誇れないことである。

自分の国の国歌を歌おうとしない人、「国益」という言葉自体を使う人を嫌がる人。本来は、日本人の過去の過ちを克服するように自分達の日本と一緒に作ってゆこう、と心がけるべき。しかし、そう心がけない人、国の不満のみをわざわざ「公」に広める人。太古の昔であっても昨今であっても、日本のより良い将来を共に作れない人である。そのような人であれば、外国で暮らして日本以上の「理不尽」がどのくらいあるのか、海外に出て見える日本の長所・短所を

感じ、それでも日本人を放棄しないのであれば、「国益」をあげながら更に理想の国へとなるよう、自らが政府にしつかりと「提案書」を提出すべき。賛同する人達が多くなれば理想の社会への「力」となる。

自分の住む国に対して、不満のみの人・より良い国造りを諦めた人、であれば世界のどの国に行こうと何も改善はできない。

崔書勉先生は、記録の徹底調査をされつつ、「韓国」の「国益」の追求を言動されている、そして支える国は違うが、私は、記録の管理を徹底しつつ、「日本」の「国益」の追求を言動する。レベルは違いすぎるが方向は同じである。

私は高校生ごろから右でも左でもなく、「中庸」の精神を重視しているが、

大学時代に話し合う機会があった「右翼学生」、「左翼学生」からは、長く話すほどに「純粹」さを「双方」から感じた。

私利私欲にある自分の勉強と健康の為、親友や恋人をつくる為の貴重な大学生活。それは大切な人格形成・成長の時間である。

しかし右左の「双方」は、私利私欲の時間だけではなく、大学の体制・国・世界の体制を憂いて言動している。一般の学生よりも、社会を「良く」しようとする積極的な意気込みを感じる。右・左にしる、自分勝手だけでは無い熱き人物の「証明」である。人格形成・成長には大いに有意義な時間・経験となる。そして一般の学生が、私利私欲から離れた「双方」を、

「右翼・左翼」と名付けるのは勝手ではあるが、「異端児扱い」して「交わることすら放棄」する学生が多く有った。それらの学生達は、「何に」「誰に」「どのよう」に「教育・影響された視点であるのか？」そのことに「恐怖」を感じる。

● 昨今…

米国と北朝鮮の間にて開戦への熱が上下している。「戦争」となると右・左や一般学生の話をしているどころでは無い。東アジアの平和が一気に崩壊させられる方向へ動く可能性があり、東アジアに在る国々こそが一番避けたい戦争である。特に、日本と韓国はそれを全く望んでおらず、戦争を避ける方法を考え、言動しなければならぬ。

戦争の「準備」「防衛」の為に、見え難い所にて様々な組織・国の多くが直接・間接的にその「大商い」に関わってしまう。日本国内も例外では無く、COCOM違反にならない部品製造等の企業も知らずに戦闘関連の機材に使用される。そして、日本は自国防衛の為の大金を支払う側として「商い」に参加させられることと成る。

歴史を顧みると、開戦前・後によつて、一番「お金」を得る組織・国が、一番の戦争の「加害者」となり易い。

「加害者」の組織・国に対し、戦争の実行の事前に、日本も含めた世界の国々が勇気を出して想いを「本音」で話し合うべき。  
※ 今後の「人類の未来」が定まってゆく。

● 父・私・子供…

と、三代にわたり崔書勉先生に関わらせて戴いております。父親から引き継いだ私の仕事は

「記録を後世に遺す」という内容であり、私は仕事を通して三十数年前に崔書勉先生とのご縁が始まりました。

日韓談話室メンバーの方々とのご縁も不思議なものです。もし前世があるとすれば、「不幸を幸福へ」と言動する同じような活動をしていたのでしょうか。メンバーに関わりのある皆様方との多くの出会いに感激しております。

そして、メンバーの方々には、若年で小生意気な私の一面も諦めて？ 戴いており、心より感謝申しあげます。

日韓談話室 勉強会の内容の多くは、とても視野が広く、深い「記録調査」に基づき、視点が高い。

「国際平和」の前の「東洋平和」、その事前の「日韓の理解・平和」、その為の「談話」を諦めない日韓談話室への参加ゆえか、

崔書勉先生方からの「感電・伝染」のためか、ときに「自分がやらねば誰がやる」との感覚が起こる不思議な環境でもありません。

私の、普通の人間、普通の生活環境、普通のいち中小企業の経営者、からは全くかけ離れた視点へ。そして本業の「記録の管理」の仕事が、将来如何に日韓・東アジア平和・国際平和への「必要性」を増すと、その重要性の高さを、日韓談話室 崔書勉先生を囲む会にて何十回となく確認する事ができました。更に自分の・自分達のノウハウで出来得る事がある、と必然と自分独自の視点による試行錯誤の時間が、年々増えてくる。

自分の人生は、「一生」であるが、全く足りない。「自分がやりたいこと・自分がやるべきこと」が数十と湧いてくる。急ぎ対応しても、「五生」以上の時間がかかる。しかし、それを理解・応援してくれる人が少しずつ現れるものである。

#### ●怪物の力..

※【世に生を得るは事を為すにあり】とは幕末 薩長同盟等で尽力した坂本龍馬氏が後世に遺した言葉。  
(人は事を成し遂げる使命を受けて生まれてきた)

自分如き人間が日々その言葉を体感しながらの「会社・社会貢献」「国益の増大」「日韓・東アジアの平和」「国際貢献」へ。そして、「ノーベル賞」や「オリンピック」のような大会は無いのですが、例えば「国際社会貢献大会」ができれば、私はその立案・企画・主催・参画・実行・選手・サポーター・審査・応援者、でもあろう。

崔書勉先生の「凄み」ある人生、「使命」を全うする強烈な「力」。自分の視点の変化、そして微力ながらも

私の「言動」するパワーは、その大いなる「力」の影響に他ならない。

文末となりますが

本日を迎える崔書勉先生、日本に上陸され六〇周年間の様々なお勉め・お勤め・お努め、を称へつつ、感謝とお祝いを申しあげます。誰も真似が出来ない「生涯」（日韓両国に精通した生涯）の一端に私なども関わらせて戴きながら、そして多くの不可能を可能とされる「日韓外交の怪物」崔書勉。先生のその

「怪物」なりを間近で感じさせて戴いていることは、私の生涯のなによりの「宝」です。

この超人の大いなる「力」は、私だけでなく崔書勉先生をとりまく人間に、既に「感電・伝染」しております。

「ここより感謝申しあげます」。

六〇年 韓国と日本国、未来の世界構築の為のお努め、本日五月二十七日にその大きな節目を迎えられました事、  
「まことにおめでとございませう」。

今日のお祝いを心から称えつつ 晴天に通ずるような歓喜に満ちた思いで

日本上陸六十年目の祝賀会 そのお手伝いを兼ねて 参加をさせて戴きます。

感謝

平成二十九年（2017年）五月二十七日

森松義喬 拝



